

看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

近代医療の起源 (9章)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
Center for the Study of Communication-Design, CSCD
池田 光穂
IKEDA Mitsuho

看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

近代医療の起源 (9章)

医療のさまざまな〈かたち〉

- 近代医療 (modern medicine) という用語が登場する19世紀末期から20世紀初頭にかけての欧米では、近代医療とは異なった「医療」すなわち、伝統医療、古代医療、民間医療など、今日では代替医療 (alternative medicine) や補完的医療 (complementary medicine) と称される医学への学問的関心が生じる。

四百年以上の広がり？

- 近代医療の出発点と主張される医学上の発見やその歴史的事象については、多くを指摘することができます。医学理論に注目すると、古くは血液循環を発見したウィリアム・ハーヴェイ (1578~1657)、臨床現場における観察を重視し、今日的な病気観察の類型論を確立したトマス・シデナム (1624~1689)、30歳で夭折するまでに精力的な病理解剖を行なった組織解剖学の祖マリ・フランソワ・ビシャ (1771~1802)、実験にもとづく生理学の基礎づけを行なったクロード・ベルナール (1813~1878)、実験医学の基礎をつくったルイ・パスツール (1822~1895)、パスツールとならび細菌学の祖とされるロベルト・コッホ (1843~1910) まで、その科学的認識の始祖とされる人たちの活躍にはおよそ四世紀の広がりがあります。

社会統制としての医療

- 近代医療を典型的な近代制度と見立てて、社会統制のシステムであるとみると「医療警察」制度を考案したヨハン・ペーター・フランク (1785~1821)、イギリスの衛生改革運動の強力な推進者であり公衆衛生法と行政機関としての保健局の設置に貢献したエドウィン・チャドウィック (1800~1890) などが、まさに近代医療の確立者であると言えなくはありません。

近代科学としての医療

- 近代医療を今日のようなシステム化された科学的知識とその技術的外挿と考えると、そのモデルは新大陸の北アメリカに求められ、定番となる医学教科書をつくったウィリアム・オスラー (1849~1919) やジョンズ・ホプキンス大学設立の功績者であるウィリアム・ヘンリー・ウェルチ (1850~1934)、医療の定式化をロックフェラー財団の全面的な援助をバックに制度改革として精力的に推し進め、世界の最高水準にまで高めたサイモン・フレクスナー (1863~1946) の名前を忘れるわけにはまいりません。

近代という時間性

- 近代 (modern) という表現における時間概念は、それが同時代の (contemporary) 中にあるということです。ということは、我々が享受している同じ医療体系が、ある時期以降に到来した／誕生した／確立した医療と同じものだと感じた際に、それを我々は近代医療と呼んでいるのです。しかし、その時間的概念を軸にして近代医療というものを理解する人の態度は、ただ単にその基準の中に安住しているだけではありません。同時代においてさえ、時代遅れの医療や近代医療と異質なものであると見なされる医療は、近代よりも時間的に遡る「前近代」ないしは「古代」や「中世」といったレッテルを貼られます。

7

反医学とは？

- 同時代性が保証する普通の世界の外側にいるという意味において、否定的な「反医学」とか「非医学」という接頭辞を付けられて表現され、同時代性つまり同じ世界の圏外に放り出されてしまいます。なぜなら、たいていの人間集団は、自民族中心主義つまり「自分たちがつねに他の集団の人たちよりも優れている」という偏見の色眼鏡によって自分たちが当然とみなすものを最高ないしは最適なものと思見しがちだからです。

8

モダンメディスン

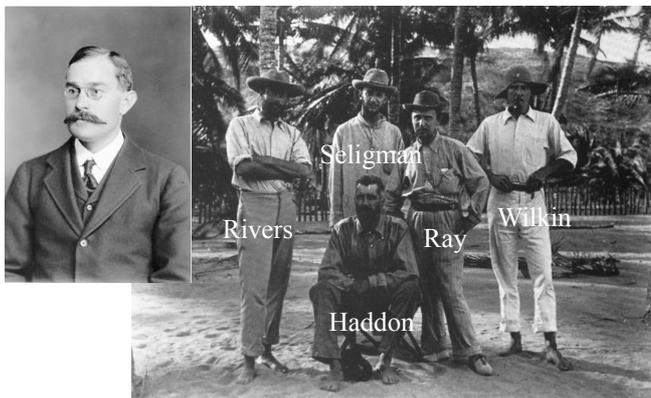
- アメリカ合衆国ミシガン州バトルクリークにあるサナトリウム兼病院において『モダンメディスンと細菌学の世界』という雑誌が1893年に発刊されます。細菌学は、その当時の近代医療におけるもっとも強力な学問的パラダイムでした。この雑誌は翌年に「世界」を「レビュー」に変えた後、1900年に細菌学の名前が消え『モダンメディスン』と改名されます。モダンメディスンを冠した雑誌は1943年に『モダンメディスン・マニュアル』、これは15年後に『レビュー・オブ・モダンメディスン』と改名されますが、この『モダンメディスン・マニュアル』になるまで現れません。

9

W.H.R. リヴァーズ

- イギリスの精神科医で人類学者のウィリアム・H・R・リヴァーズは1915年と1916年にロンドンの医学校での講演で、未開医療 (primitive medicine) について重要な指摘を行なっています。リヴァーズは、未開医療の研究以外に、第一次世界大戦期に起こったシェルショックすなわち戦争神経症や、産業革命から飛躍的に進歩を遂げた大量旅客輸送手段である鉄道の大規模な事故によって生じる心理的トラウマ、当時は鉄道脊損と呼ばれていましたが、それらの心理的ショックの研究を行なっていました。今日ではリヴァーズの名前は、PTSD研究における、もっとも初期に精確な臨床記録と心理的トラウマの理論を打ち立てた1人としてよく覚えられています。

10



William Halse Rivers Rivers, FRCP, FRS, (12 March 1864 – 4 June 1922) was an English anthropologist, neurologist, ethnologist and psychiatrist, best known for his work with soldiers during World War I who were suffering from shell shock.

11

2つの異質性

- 1つは同時代性を拒絶する発展の途中で古くなってしまったモダンメディスンの部分的過去であり、
- 他の1つは前近代=非近代=伝統=未開という発想の連鎖の中で位置づけられる民俗医療という近代医療から排除された迷信や宗教的要素のこと

12

医療的多元論 (medical pluralism)

- 復習
- 多元的医療システム／多元的医療体系
- 多元的医療行動

13

生物医療の多元性

- 一見一枚岩に見える近代医療つまりモダンメ
ディシンにおいてすら、その実態は、中心的な
考え方をなす生物医療 (biomedicine) を中核
に、相矛盾する複数の理論と実践からなる構成
体である可能性が高いということです。このよ
うに見ることで、非近代医療つまり民俗医療も
また近代医療との同列の次元で取り扱うことが
できる地平を我々は持つようになった

14

「社会の脱病院化」とは？

- 2002年12月2日ユダヤ人でカトリック司祭で
あったイヴァン・イリイチ (1926~2002) が
亡くなりました。イリイチは「社会の脱病院
化」について直接このスローガンを掲げたわけ
ではありません。イリイチの著作の原題である
『医療の限界』を1978年に日本語に翻訳した
金子嗣郎氏という精神科医が、イリイチの著作
がもつメッセージを日本語のこの標題として掲
げたのです。

15

「加療のために入院する」

- hospitalizeは「加療のために入院する」という
意味があるので、この用語法は日本語ならではの
特殊なものです。病院を「近代システムの収
容所」という風な悪い意味合いで用いている点
でも、脱病院化の意味はさまざまな誤解を産む
可能性のある多義的な用語になりました。そし
て、当時の世界的な近代医療批判の時流に乗っ
て、この言葉は人々の心を魅了した。

16

医療化の現在

- 医療化 (medicalization) に関する議論や病院のシステムその
ものは、時代や経済の流れを受けて変容を遂げてきました。そし
て、病院はかつての全制的施設 (total institution) という古
典的な意義を失いつつあることは明らかです。したがって、現況
の日本において脱病院化の理念は、それをオリジナルに掲げた人
たちとはかなり異なったかたちで実現されつつあるといえます。
- しかし「病院化」とは医療化のことであり、病院が社会の中の
施設から社会の制度そのものへと、あるいは、身体を収容する施
設から時代精神を収容する社会制度となったと理解すれば、病院
化社会は脱病院化という経路を通らずに別種の病院化社会になっ
たのかもしれない。

17